

# 東京高等商業学校・商科大学における「グルント」

「座談会 一橋社会学の七十五年」(『一橋論叢』第24巻第5号(1950年11月)所収)を読む\*

坂野 鉄也

2017年8月

## 目次

1	はじめに	1
2	「文化」以上の何かをもたらす文学	3
3	「教養科目」としての哲学、「グルント」としての哲学	10
4	選ばれる歴史学	15
5	おわりに	21

---

\* 本稿は、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)「20世紀前期の帝国日本における教養の知と技をめぐる実学リテラシー研究」[2015年度～2017年度](課題番号:15K02864)による研究成果の一部である。

## 1 はじめに

一橋大学の源流をなす東京商法講習所が設立され75年を経過した1950(昭和25)年、一橋大学では商学・経済学・法学・社会学というそれぞれの学部あるいは学科ごとに四つの座談会が企画された<sup>1)</sup>。それらの内容は同年に刊行された『一橋論叢』第24巻にそれぞれ4号に分けて収録、公刊された<sup>2)</sup>。その座談会の一つが「一橋社会学の七十五年」と題されたものである<sup>3)</sup>。「一橋社会学」という名が付されているが、一橋大学の社会学についての研究や教育について語られたものではない。1949年の新制一橋大学設立以前、東京高等商業学校や商科大学・産業大学においておこなわれた商学・

経済学・法学以外の、人文学、教育学、あるいは、純粋な社会学だけでなく社会政策、労働問題など多岐にわたる社会にかんする学の教育・研究、つまり今日の一橋大学社会学部につながるものについての語りである。

本稿の目的は、この座談会「一橋社会学の七十五年」を導きの糸として一橋大学の前身校を事例に、商学・経済学を教授する実業系の高等教育機関における、歴史、文学、哲学などの人文学の教育・研究に対する認識を分析することである。1947年の旧教育基本法以前、いわゆる「旧制」の実業系高等教育機関における実業系以外の科目を、ここではかりに「教養科目」と呼ぶことにすると<sup>4)</sup>、こうした「教養科目」、とりわけ文学、哲学、歴史学にかかわる科目が実業教育機関においてどのように位置づけられ

1) 1950年当時の一橋大学は、経済学部、商学部と法学社会学部の三学部体制であったが、法学社会学部は法学科と社会学科に分かれており、今日の四学部体制に近いものであった。

2) 「座談会 一橋商学の七十五年」 『一橋論叢』 第24巻第2号、1950年8月、214-240頁。「座談会 一橋経済学の七十五年」(以下、「経済学」と略す。) 『一橋論叢』 第24巻第3号、1950年9月、355-384頁。「座談会 一橋法学の七十五年」 『一橋論叢』 第24巻第4号、1950年10月、497-527頁。「座談会 一橋社会学の七十五年」(以下、「社会学」と略す。) 『一橋論叢』 第24巻第5号、1950年11月、646-680頁。

3) 註2)、参照。

4) ここで言う「教養科目」は“liberal arts”の訳語に相当する。Merriam-Websterのweb版において“Definition of liberal arts for English Language Learners”として“areas of study (such as history, language, and literature) that are intended to give you general knowledge rather than to develop specific skills needed for a profession”という語義が示されているが、ここではこれに倣った(<https://www.merriam-webster.com/dictionary/liberal%20arts> 最終アクセス日:2017年8月4日)。なお、「教養」の語が英語のcultureや独語のBildungの訳語として使われ始めるのは大正期に入るところであり(進藤 咲子 「「教養」の語史」 『言語生活』 第265号、1973年10月、70-71頁。)、明治期以来の東京高商・商大の教育を扱う場合にその語を使うのは不適切と考えられる。しかし、「自己形成としての教養から、教養の教育化への萌芽」があらわれるのは1930年代教養論からであるという、教育哲学者の松浦良充の指摘(松浦 良充 「「教育」できるものとしての「教養」の語り方——教養論の歴史から——」 『教育哲学研究』 第87号、2003年5月、36頁。)にしたがえば、座談会がおこなわれた1950年時点における参加者の語りを分析する場合に「教養」という名辞を使うことは支障がないであろう。また「教養科目」という語にたいして、大学基準協会によって1947年に制定された「大学基準」では「一般教養科目」あるいは1950年時の改定以降の「一般教育科目」という名辞も使われているが、米国のgeneral educationを踏まえたこれらの科目とここで使用しようとする科目は必ずしも一致しない。これらの点から、歴史的な用語ではないが、「教養科目」という名辞を用いる。ただし、特殊な用語使用であるので、つねに括弧を付す。また「教養科目」には、こんにち一般的に使われる用法もある。それは、「教養教育」を目的として設定された科目という意味である。この場合の、「教養教育」とは、「大学設置基準の大綱化」によって「一般教育」の法規的根拠が消失して以降、「一般教育」を代替する用語として一般化したものである(松浦 良充 「「教養教育」とは何か」 『哲学』 第66号、2015年4月、84頁。)。したがって、ここで用いる「教養科目」は、「専門科目」と対となる「教養科目」というこんにち用いられる名辞とも完全には一致しない。なお松浦が指摘するように、自己形成という意をもつBildungの訳語としての「教養」は、「「教育」がもつ啓蒙(主義)的な志向性とは対抗的な概念」であるため(松浦 「「教養教育」とは何か」、88頁。)、教育にかかわる名辞である「科目」とは本来、親和性がない。

てきたのかという点について、それぞれの科目にかかわった教官やそうした授業を受けた生徒／学生（のちに母校に働くことになった教官）の語りから析出しようというのである。

東京高等商業学校や東京商科大学（以下、それぞれ「高商」「商大」と略す。）の「教養科目」にかかわる教育について筆者はこれまで外国語や商業道德の教育にかんして論じてきたが<sup>5)</sup>、ここでは、過去においておこなわれた教育の実態そのものを問うのではない。過去におこなわれた教育を教官や生徒・学生といった当事者が後年においてどのように認識し、それをどのように自己表象したのかという分析をおこなう。

その際のキーワードは、本稿のタイトルにある「グルント」という名辞である。ドイツ語の名詞“Grund”に由来するこの名辞は「基盤、基礎」の謂であるが、同系統の形容詞・副詞である“gründlich”とともに高商・商大の教育・研究を語る場合に頻出する<sup>6)</sup>。商学・経済学・法学における実践的・技術的なもの＝「実学」の対義として用いられ、「教養」という名辞よりも広義に使われていると思われる「グルント」の解明が、高商・商大の教育・研究の理念を描きだすうえで重要だと考えられる。

ところで、ここで対象とする座談会は、アダム・スミス研究者である高島善哉法学社会学部社会学科長・教授の司会のもと、大学側出席者

11名と来賓2名によっておこなわれた。大学側の出席者は以下のとおりである。

- 上田辰之助 経済学部長・教授（経済史）
- 大塚金之助 法学社会学部社会学科教授（社会思想史）
- 上原専祿 法学社会学部社会学科教授（歴史学）
- 杉本栄一 経済学部教授（経済原論（第二））
- 関泰祐 法学社会学部社会学科教授（独語）
- 太田可夫 法学社会学部社会学科教授（哲学）
- 山田九朗 法学社会学部社会学科教授（文学（第二））
- 西川正身 法学社会学部社会学科教授（文学（第一））
- 増田四郎 経済学部教授（西洋経済史）
- 板垣與一 経済学部教授（経済政策）
- 鈴木秀勇 法学社会学部社会学科教授（教育原論）<sup>7)</sup>

これら11名の教官のうち、関、山田、西川の3名以外はいずれも専攻部を含む高商もしくは商大の出身者である。山田、西川も商大予科教授・商大講師を務めており、1947年以前からかわりのある人物である。唯一、関のみが

<sup>5)</sup> 坂野 鉄也 「東京商業学校・高等商業学校・商科大学・産業大学の外国語科目を担った日本人教員とその教育」 滋賀大学経済学部 Working Paper Series No. 227、2015年4月。同 「「実用」の意味するところ：東京高商・東京商科大学商学専門部の英語教育における神田乃武の“culture”」 滋賀大学経済学部 Working Paper Series No. 252、2016年7月。同 「高等商業学校「商業道德」科の素描——「商業家」のための倫理とは」 『滋賀大学経済学部研究年報』 第23巻、2016年11月、59-78頁。同 「谷本富の「新人物論」における商業道德論——中島力造、ジョージ・トランブル・ラッドとの比較」 滋賀大学経済学部 Working Paper Series No. 263、2016年12月。

<sup>6)</sup> たとえば、最新の学校史である『一橋大学百二十年史：captain of industryをこえて』においても「辛酉事件以降東京高商では狭い技術的な商学のうえに、よりGründlichなものを求める動きが着実に進行していた。」という文がある。一橋大学学園史刊行委員会編 『一橋大学百二十年史：captain of industryをこえて』 一橋大学、1995年、139頁。

<sup>7)</sup> 肩書きおよびかっこ内の講座名もしくは教科名は、『一橋大学一覧 昭和二十五年度』（<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/da/handle/123456789/7552>）による。なお記載順は、座談会掲載時の順（上段右から下段左）による。

1947 年以後に着任した。

なお来賓二名は、いずれも元商大教授で外国語・外国文学教育を担った吹田順助（在職期間：1925 年～1944 年）と内藤 濯（<sup>あろう</sup>在職期間：1928 年～1944 年<sup>8)</sup>）である。

これらの教官、元教官による座談会は、以下の小見出しによっておおよそのテーマが示されている。

- 社会学部発展の三つの時期
- 英語英文学の草分け神田乃武
- 教養としての語学教育
- 倫理、論理、心理学
- 歴史の横井時冬
- 第一期から第二期へ
- 辛酉事件の意味するもの
- 名は単科、実は総合大学
- 社会政策学会を中心として
- シュトゥルム・ウント・ドラング
- 左右田・田邊論争
- 左右田ゼミナール、哲学全盛時代
- 吹田順助のドイツ文芸学
- 仏文学の内藤濯——ブルジェの短編から
- 仏大使夫人を感動せしめた與田信一
- 英米文学を広い背景の中で
- 英仏独の社会学
- 社会学部の新なる使命

おおまかにいえば、翌年 1951（昭和 26）年 4 月の社会学部の誕生を控え、社会学部を構成す

ることになる社会学や哲学、歴史学、文学など人文学、教育学の高商から当時いたるまでの歴史的な位置づけが語られ、最後は学部となる社会学部の性格について議論されるという構成になっている。

座談会ではこのような視点においておこなわれたため、「教養科目」である文学、哲学、歴史学が高商・商大教育にどのように寄与してきたのかが示されいくことになるが、それはあらたに誕生する社会学部の存在意義を示すという意図もあったように思われる。

## 2 「文化」以上の何かをもたらす文学

司会の高島から最初に語られるように、座談会では七十五年の歴史を「第一の時期」の高等商業学校期、「第二の時期」の商科大学期から 1950 年度まで、そして「第三の時期は、終戦後一橋大学の社会学部がいよいよ独立する」というように時期区分されて進められる。ところが、この「第一の時期」を「前史」と位置づけており、商法講習所設立から 75 年とされる歴史のうち、1887（明治 20）年に高等商業学校と名称を変更する以前のおよそ 10 年強については「前史」にも含められず、全く触れられてない<sup>9)</sup>。この 1887 年以前に「教養科目」と考えられる科目が教えられなかったわけではない。商法講習所時代から、少なくとも英語、歴史や

<sup>8)</sup> 1928 年以前には 1921（大正 10）年度に附属商学専門部に講師として出講したこともある。『東京商科大学一覽 自大正十年至大正十一年』<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/da/handle/123456789/7531> 最終アクセス日：2017 年 8 月 27 日。以下、『東京高等商業学校一覽』および『東京商科大学一覽』については、特記しない限り、一橋大学リポジトリにある“Special Collections”に含まれる「学園史関係資料」のサブコミュニティである「学校一覽」に掲載されたものを参照した。

<sup>9)</sup> 「社会学」、647 頁。

<sup>10)</sup> たとえば、1876（明治 9）年の「商法講習所略則」においては、英語が科目としてあがっているし、1879（明治 12）年の「東京商法講習所規則」においては、「商業歴史」「商業地理」という科目もある。『一橋大学百二十年史』、13 頁および 17 頁。

地理は教えられた<sup>10)</sup>。しかしそれは、商学という専門的な知識を身につけるために必要な能力の習得や背景知識であって、「教養科目」とは認識されていなかったということになるのである。ここに示されるように、座談会の参加者には専門科目の基礎やその前提となる知識・技能とは異なる「教養科目」あるいは「グレント」のイメージが共有されていたようである。

先に記した座談会の小見出しにあるとおり最初に語られるのは、商法講習所設立から20年弱、高等商業学校に名称変更されてから5年が経過した1893（明治26）年9月に着任した神田乃武についてである<sup>11)</sup>。座談会においては神田を「一橋社会学」あるいは「教養科目」教育の嚆矢とみなすという認識が見てとれる。

とはいえ、神田を最初に取り上げたのは、参加者が現実に東京高商・商大にかかわった時期が関係しているとも考えられる。座談会の参加

者が生徒・学生や教官としてかかわったのはおもに大正期からである。神田は1893年の着任後、1916（大正5）年に教授職は辞するものの、1923（大正12）年12月に亡くなるまで講師として勤めた<sup>12)</sup>。座談会参加者が共通して語ることができる最も古い教官である。もちろん神田自身が名誉教授の称号を最初に与えられるなど、東京高商・商大における彼の功績が大きなことはたしかであるが、関を除く参加者が共通して想起できる最古参の教官であったということは大きいであろう。

また、上田辰之助の存在が影響した可能性もある。1910（明治43）年9月に予科に入学した彼（1914年7月東京高商本科卒、1916年3月同専攻部貿易科卒）が、参加者のなかでは東京高商・商大との縁はもっとも長い<sup>13)</sup>。

じっさい座談会においては、上田が以下のように神田の名前をあげ、口火を切る。

11) 神田の着任年月については、以下による。坂野 「東京商業学校・高等商業学校・商科大学・産業大学の外国語科目を担った日本人教員とその教育」、15頁。

12) 坂野 「『実用』の意味するところ」、4-6頁。

13) 上田は、専攻部を卒業した同じ年、1916年4月20日付けで東京高商講師に着任、1917年11月21日付けで教授として東京高商に勤めた。1918年3月21日から1922年5月6日まで在外研究に出るものの、留学中、大学昇格にともない1920年4月1日付けで東京商科大学附属商学専門部教授となり、帰国後の1922年5月20日付けで大学講師を嘱託され、以後、助教授、教授として商学専門部と大学で勤務した。戦後も一橋大学経済学部教授、のちに社会学部教授として、1955（昭和30）年3月31日に定年退官するまで東京高商およびその後身校とともにあった。桶舎 典男 「上田辰之助名誉教授年譜」 『一橋論叢』 第37巻第5号、1957年5月、554-566頁。

14) ここで使われる「文化科学」なる語は今日では耳慣れない言葉であるが、短言すれば、自然科学と対となる科学である。ここでの「文化」の語彙は今日とは異なり、後述する左右田喜一郎、あるいは桑木嚴翼の「文化主義」における「文化」の定義を踏まえたものと想定できる。1918（大正7）年に設立された啓蒙団体、黎明会の第一回講演会（1919（大正8）年1月18日）で『『文化主義』の論理』という論題で話をした左右田は、「所謂文化とは自然に対する語である。」と述べている。左右田 喜一郎 『『文化主義』の論理』 『左右田喜一郎全集』 第四巻 岩波書店、1930-31年、9頁。また、森一貫によれば、桑木のいう「文化」のポイントは次の5点であった。「一 文化は精神的、文明は物質的である。／二 文化は自然と反対のものである。／三 文化は価値を内包している。／四 文化は理性と結びついている。／五 文化は人格と不可分である。」森 一貫 「大正期の「文化」概念——「文化主義」をめぐる——」 『日本文化史研究』 第12号、1990年1月、104頁。また林正子は「〈文化〉概念を規定するために、嚴翼はこの件では〈文化〉＝〈クルツール〉と〈対立〉する概念として〈自然〉＝〈ナツール〉を挙げ、その際の基準として〈価値〉の有無を指摘、そこから〈自然科学〉に対する〈文化科学〉という学問研究の相違も対照している」と述べている。林 正子 「桑木嚴翼の〈文化主義〉：提唱の必然性と歴史的展開」 『岐阜大学国語国文学』 第27号、2000年3月、41頁。ここでいう〈クルツール〉〈ナツール〉はそれぞれドイツ語の名詞、“Kultur”と“Natur”である。要するに、桑木や左右田の言う「文化」は、「自然」に対立するものであり、「価値」を内包し、理想的なものとしてのものである。したがって、「文化科学」というのは、物質間の因果によって説明される「自然科学」と対立し、精神的な価値意識を対象とするものとして提示されている。なお、左右田は先の講演録の附記において、桑木が左右田に先んじて「文化主義」という名を用いたことを、そして、「文化主義」は桑木

高等商業学校時代の文化科学的性格について考えます<sup>14)</sup>、やはり神田乃武先生などは大きな存在であったと思います。この時代の学問又は教育の中心は諸々の商業学科でありましたが、それらと並んで語学なканずく英語の教育は重要な地位を占めていました。その語学教育の最高指導者というか、大御所とも言うべき人が神田先生であったのです<sup>15)</sup>。

このように、商業にかかわる学科とともに外国語教育が重要であったことを述べ、神田がその中心的な人物であったという形で説きおこすのである。

神田が外国語教育、とりわけ英語の教育において最重要の人物であったことは、商法講習所設立から100年を経た1975（昭和50）年以降に進められた創立100周年記念事業の一環で1986（昭和61）年に刊行された『一橋大学学問史』においても指摘されている。「英語：一橋大学英語百年の歩み」を記した山川喜久雄は、英語教育の100年を4期に分けているが、「学制が改正され」た1893（明治26）年を第二期の、大学昇格の1920（大正9）年を第三期のそれぞれ起点としているが、第二期の始まりとともに着任した神田が、1923（大正12）年12月の死後も1949（昭和24）年の新制大学発足前

の第三期まで大きな影響を残したことを指摘している。まさに第三期（座談会における「第二期の時期」）は、

神田の遺訓のもとに、卓抜した語学的実力を備え、あるいは本格的な学者としての英米文学研究者が英語教官として相次いで就任し、英語科の陣容が一段と強化進行された時期である。この第三期において高度の実用を主旨とする英語と総合的社会科学の一環としての、あるいはそれとの接点をなす人文学としての英米文学が一橋学風の一斑として結実されたといえる<sup>16)</sup>

というのである。この山川の記述からは、神田が高商に英米文学教育をもたらした人物であり、商大昇格後の人文学の礎を築いたと見られることが読みとれるのである。

上田は言う。

神田先生は、英語の実用的な方面に秀でておられ、ことに演説は英米人に負けぬほど御堪能でしたが、同時に教養としての英米文化を身につけられた極めて洗練された紳士であられました<sup>17)</sup>。

ここで上田は、「教養」を「英米文化を身につ

の創造でも左右田のそれでもなく「恐らく独逸理想主義に其の根底を置く凡ゆる学徒、凡ゆる思想家の悉く抱懐せざるを得ざる所」と述べている。左右田 『文化主義』の論理、22-23頁。この「独逸理想主義」とは「明治末年より活発に紹介、輸入されたドイツ理想主義の哲学、さらにより端的にはヴィンデルバント、リッケルト等の新カント派、いわゆるドイツ西南学派」のことである。生松 敬三 『現代日本思想史4 大正期の思想と文化』 青木書店、1917年、91頁。ここで名指しされているハインリッヒ・リッケルト（Heinrich Rickert）こそが「文化科学」という名辞を用いた人物である。リッケルトや「文化科学」については、佐藤俊樹による以下の論稿がわかりやすい。佐藤 俊樹 「ウェーバーの社会学方法論の生成第3回 リッカートの文化科学—価値関係づけの円環」 『書齋の窓』ウェブ版 第648号、2016年11月。なお冊子版もあるが、それでは紙幅の都合で註の一部が省略されており、ウェブ版を参照すべきである。[http://www.yuhikaku.co.jp/static/shosai\\_mado/html/1611/10.html](http://www.yuhikaku.co.jp/static/shosai_mado/html/1611/10.html) 最終アクセス日：2017年8月20日

<sup>15)</sup> 「社会学」、648頁。引用にあたって旧字体は新字体に改めた。以下、同様。

<sup>16)</sup> 山川 喜久雄 「英語：一橋大学英語百年の歩み」 一橋大学学問史刊行委員会編 『一橋大学学問史』 一橋大学、1986年、1048頁。

<sup>17)</sup> 「社会学」、648頁。

けられた極めて洗練された紳士」である神田が体現しているものという形で表している。「教養」を「文化」「洗練」という名辞をキーワードとして述べるのである。

座談会において神田の偉績として取りあげられるのは、英語劇の実施や英文学者の採用である。英語劇は生徒に英語を話す訓練をさせるといふ意図ではじめられたと述べられているとおり<sup>18)</sup>、生徒の英語運用能力の向上がもともとの意向であったろう。ところが上田は、神田が教えたのは英語や英文学そのものというよりも英文学の精神だったと言う。そして、それこそが「文化」であるとも述べている。

むしろアングロサクソンの文化を体得して英文学の精神というものを教えられた。〈中略〉英語英文を通じて文化の香りを伝えるという風でした<sup>19)</sup>。

ここで上田は、英語や英文学の教育をとおして神田によって持ち込まれた「文化」をある種の余技のように捉えている。

要するに一橋の学風に――商学の簿記や商業算術のコチコチの中に、人間的ゆとりを与えたものがあつたとすれば、その時分の英語英文学であつたと思ひます<sup>20)</sup>。

高商期、すなわち、座談会における「第一の時期」においては、文学教育が「人間的ゆとり」＝「文化」をもたらしていたというのである。

文学が高商・商大教育に「文化」をもたらすものであるという発想は、上原専祿にもみられる。

〈学校〉全体の気風は上田〈辰之助〉さんのおっしゃる通りですね。英文学、フランス文学、ドイツ文学、そういうもので気分がでておりましたね<sup>21)</sup>。(〈 〉内は引用者による補筆。以下、同様。)

上原は、英文学だけでなく、仏文学や独文学の教育を通じて「文化」の気分がもちこまれたというのである。

上原も上田と同様、高商・商大の歴史を見てきた人物である。彼は、始業月が9月から4月に変った最初の年度、1916(大正5)年度に東京高商予科に入学し<sup>22)</sup>、1922(大正11年)に専攻部を卒業した。さらに東京商科大学研究科に進み、翌1923年冬からウィーン大学に留学している。留学から帰国した1926年の4月から1928年3月までは高岡高等商業学校教授を勤めた、彼が東京商大に商学専門部教授として戻ってくるのは、1928(昭和3)年4月である。

とはいえ、上原の言う仏文学や独文学は商大期、すなわち座談会でいう「第二の時期」に花

18) 「社会学」、649頁。

19) 「社会学」、651頁。

20) 「社会学」、651-652頁。

21) 「社会学」、653頁。

22) 上原自身が「本を読む・切手を読む」(『クレタの壺』 評論社、1975年、281頁)に1915(大正4)年4月に予科に入学したと書いたこともあって、「1915年4月予科入学」と記されることが多い。たとえば、片岡 弘勝 「上原専祿「主体性形成」論における「近代」相対化方法―生涯にわたる時期区分とその指標―」 『奈良教育大学紀要(人文・社会)』 第54巻第1号、2005年、21および23頁。しかし、始業月の変更の関係で1915年4月の入学者はおらず、『東京高等商業学校一覧 従大正5年至大正6年』に掲載されている「学生生徒現員」の「予科」「二ノ組」に「上原専三」の名がある。「専三」は上原の旧名である。片岡「上原専祿「主体性形成」論における「近代」相対化方法」、22-23頁。その後、在学についても、『東京高等商業学校一覧』および『東京商科大学一覧』で確認できる。また、この座談会において上原自身も、「ぼくの入ったのは大正5年」と述べている。「社会学」、658頁。

開いたと考えられていたようである。そのことは、座談会にすでに退職している二人の教官、吹田順助（独文学）と内藤濯（仏文学）が「来賓」として呼ばれていることに垣間見える。それぞれ、「吹田順助のドイツ文芸学」、「仏文学の内藤濯——ブルージュの短編から」という形で小見出しにまとめられ、二人の事績について特別に語られていくことになる。

一橋の学校史において重要な転機であった商大昇格が<sup>23)</sup>、文学教育の展開においても重要な画期であったことは確かである。東京商大は、予科・本科という主系と商学専門部、商業教員養成所という二つの傍系組織とによって構成されたが、学校組織の中核をなす商大本科に吹田（1925年助教授、1930年教授）、内藤（1928年助教授、1932年教授）という文学研究者が外国語教育のみではない専任教員として就任し、商学・経済学・法学系の教官と同様にゼミナールの指導もおこなったのである<sup>24)</sup>。

しかし、吹田が述べるところによれば、文学研究者が必ずしも肯定的に受け入れられたわけではなかったようである。

その当時教授会へ行ってみると、虚学実学なんということ、非常に虚学を排斥されるような（笑声）空気もあった。文学などは虚学の虚たるものだというので、ぼくらは小さくなっていったようなわけです（笑声）<sup>25)</sup>。

講義の履修者も多くいない状態で吹田は、次のように構想することになった。

商科大学の文学というのは、文学を文学をとしてやるのも一つのやり方でしょうが、やはり何か広い社会学というような関連において研究されることが必要じゃないかということも考えるのです<sup>26)</sup>。

その結果がどうかかわからないが、吹田の担当科目に文学の名が冠せられることはなく、「独逸近代思想」（1928年度）、「独逸近代思潮史」（1929～33年度）、「独逸近代思想史」（1934・35年度、1937～40年度）、「独逸精神史」（1941～43年度）という形で推移していった<sup>27)</sup>。

たほう「仏蘭西文学」という科目を担当した内藤も当初は苦闘の日々であったようである。

何しろ学生がフランスの作品は何も読んでおらない。それでフランス文学の講義というのであるから、至難の業です<sup>28)</sup>。

そうした中で、「商科大学だから少し商業学校らしいフランス文学の講義をしないか」という上田の希望で、「文芸の商品化」という講義をした。ただし、その後には「フロベールを中心とした芸術至上主義」の講義も行なっている。

吹田も内藤もいかなる形にせよ大学本科で文学者や文学作品を題材に文学を講じた。それを支えたのは、内藤が述懐するように、学生のう

<sup>23)</sup> 商大昇格が学校史における画期であったことは後年記された大学史において典型的にあらわれている。『一橋大学百二十年史』では、第一編が昇格まで第二編が1949年まで第三編が1949年の一橋大学誕生以降となっている。

<sup>24)</sup> 『一橋大学学問史』で「ドイツ語」を執筆した宮野悦義は、以下のように記す。「大正一四年、本学のドイツ語教授陣に吹田順助氏を迎えたことは、一橋ドイツ語百年の歴史のなかでも、特筆すべき出来事といわねばならない。初めての独文出身者であり、しかもこの分野ですでに多くの業績を挙げていた吹田氏の着任は、本学の従来伝統にさらに新たな展開を促すものであった」（1128頁）。

<sup>25)</sup> 「社会学」、666頁。

<sup>26)</sup> 「社会学」、667頁。

<sup>27)</sup> 各年度の『東京商科大学一覽』による。

<sup>28)</sup> 「社会学」、668頁。

<sup>29)</sup> 「社会学」、670頁。

ちに文学的要求があったことであろう<sup>29)</sup>。そうした教官と学生との関係のなかで展開された文学の講義やゼミナールは、上田が高商期について述べたような「人間的なゆとり」をもたらしたというようなものではなかった。それは、彼らの文学の講義やゼミナールに参加した卒業生たちのエピソードが商大教育の一端として語られることからわかる。

たとえば、吹田のゼミナールからは江澤譲爾のような文学と経済学と双方の研究をしたものが出ている<sup>30)</sup>。江澤は地政学や産業立地論を主たる研究テーマとする研究者であり、晩年の1969（昭和44）年から4年間、経済地理学会の会長を務めた人物であるが、たほうで1930年代には『独逸思想史研究』（主張社、1936年）という著作、ウィルヘルム・ディルタイ『文芸復興と宗教改革』（春陽堂、1931年）やフリードリッヒ・シュレーゲル『ルチンデ』（春陽堂、1934年）、ヴィルヘルム・ヴィンデルバント『哲学とは何ぞや』（芸文書院、1937年）といった翻訳の業績がある<sup>31)</sup>。主に1930年代で時期に限定があるとはいえ、江澤の場合、もはや余技という域は超えている。

また、内藤はフランス語劇をおこなった。主役は與田信一という学生がつとめた。彼は父が日仏銀行に勤務していたため、幼少期をパリで過ごしていた。彼の発音が予科でフランスを教えた外国人教師モーリス・アルフレッド・ブルニエの耳にとまり、フランス語好きのほかの学生も加えて、フランス語劇が始まることにな

る<sup>32)</sup>。このほか、作家の伊藤整も卒業こそしていないものの、内藤のゼミナールに参加していた。

もちろん、英文学も東京帝国大の齊藤<sup>たけし</sup>勇が出講し<sup>33)</sup>、予科教授であった新里文八郎が講師となり、その後、座談会に出席している西川正身が予科教授と本科講師とを兼任する形で講義を担当し、大学本科の「英文学」の講義も続いていく<sup>34)</sup>。しかし、西川は路線転換をおこなったという。

単なる文学講義でなく、もう少し広いものと考えましたので、これまでの新里さんないし齊藤さんとは行き方を違えまして、イギリスの文芸思潮と言いましょか、それを中心に私のできる限りの文学の背景になるものを取上げるように話したのです。その後英文学を何年講義しましたか、今ははっきり覚えておりませんが、それからアメリカでもイギリスでもどちらでもよろしいというので、太平洋戦争も始まりましたので、一つにはアメリカを知ってもらいたい、また自分も調べなければいけない、そんな関係でアメリカをやり始めましたが、アメリカの文学というものはまったく文学そのものだけではどうにもしようがないので、背景になる宗教とか経済とか政治とか、たいへんなことなんですけれども、それをできるだけ勉強してそれと文学と結びつけて話をしております<sup>35)</sup>。

30) 「社会学」、667頁。

31) 「略歴および著作目録」『専修大学社会科学研究所月報』137号「故江沢譲爾所長追悼号」、1975年2月20日、14-24頁。

32) 「社会学」、670-671頁。

33) 「英文学」という科目は、神田男爵記念基金によるもので、1926（大正15）年からであった。齊藤 勇 「上田辰之助博士を憶ふ」『一橋論叢』第37巻第5号、435頁。

34) 「社会学」、672-673頁。

35) 「社会学」、673頁。

「第二の時期」、商大期における文学教育は、吹田の講義名に象徴的に現れているように、文学そのものだけでなくその背景にある文化や思潮を教授するものであった。また、その学びを活かす卒業生も生みだしていくことになった。

このように、座談会においては文学教育が意義をもったものとして語られるのだが、それがいかなる意義を有したのかという点については明確にされることはない。内藤のフランス語劇にかんする話を受けて、上田が「文化的な匂いがしたね、商大は。」と語るが<sup>36)</sup>、結局、商大期においても高商期と同様に、実学に対する虚学、「教養」「洗練」という言葉と結びつけられた「文化」を醸しだすものという形に回収されてしまうことになる。

しかし上田は、神田らによって担われた高商期の外国語教育に触れた際、

これ〈外国語教育〉がなくて、ただ商業教育一本槍であったら、一橋の学問はこんなに伸びなかったと思う。いいかえると商学に文化科学の豊かさが附加されなかったでしょう<sup>37)</sup>。

と述べているが、それは商学教育に単に附加する、広がりを与えるという意味ではない。福田徳三や上田貞次郎という高商・商大を代表する教官・研究者は神田門下であり、それは経済学者アルフレッド・マーシャル(Alfred Marshall)とギリシア古典学者ベンジャミン・ジャウエット(Benjamin Jowett)との関係に類似すると

いうのである。

何かマーシャル一派のケンブリッジ・スクールとジャウエットのヘレニズムとの間には内面的つながりがあるような気がします。われわれの一橋においても神田先生と一橋の経済学者との間にそれに似た関係があるように思います<sup>38)</sup>。

単に外国語を教えるのでもない、文学だけを教えるものでもない、文学の背景にある文化や思潮も含めて教えることによって、何かを伝えるのである。

その何かの答えは上田自身が体現している。神田からの刺激をもっとも受けたのは、神田の「一門弟」を自称する上田であろう<sup>39)</sup>。上田の研究にはさまざまな系譜があろうが、その一つは英文学であった。

1950年に公刊された『蜂の寓話：自由主義経済の根底にあるもの』(新紀元社)では<sup>40)</sup>、バーナード・マンドヴィル(Bernard Mandeville)の著した風刺詩 *The Crumbling Hive: or, Knaves Turn'd Honest* および、その風刺詩に著者自身の散文補論と注釈がついた書物 *The Fable of the Bees: or, Private Vices Public Benefits* を経済学史的また社会思想史的に読み解いている<sup>41)</sup>。

また、18世紀はじめのイギリス文学黄金期オーガスタン時代の文学作品に見られる経済思想を分析した“Mr. Spectator as an Economist: A Social Study of En-

<sup>36)</sup> 「社会学」、671頁。

<sup>37)</sup> 「社会学」、652頁。

<sup>38)</sup> 「社会学」、648-649頁。

<sup>39)</sup> 上田 辰之助 「一門弟の見たる神田先生」 『英語青年 神田乃武男追悼號』 第50巻第11号、1924年3月1日、329-330頁。また、以下も参照。坂野 「「実用」の意味するところ」、15頁。

<sup>40)</sup> ここでは『上田辰之助著作集』(みすず書房)の第4巻として再刊された1987年版を参照した。

<sup>41)</sup> さらに上田は、この風刺詩自体の翻訳もおこなっている。

<sup>42)</sup> Ueda, Tatsunosuke, “Mr. Spectator as an Economist: A Social Study of English Literature in the Augustan Age”, *The Annals of the Hitotsubashi Academy*, 3:1, Oct. 1952, 1-64.

glish Literature in the Augustan Age” や<sup>42)</sup>、  
“Saikaku’s ‘economic man’: a comparative  
study in socio-economic history with illustra-  
tions from Saikaku and Augustan English liter-  
ature” という日英の同時代文学の比較をベ-  
ースにした論考がある<sup>43)</sup>。

いずれの研究も高い英語運用能力と英文学の  
素養なくしては果たしえないものであるが、そ-  
うした主題に上田を向かわせたものこそが高商  
の文学教育だったのでなかろうか。「文化」を  
附加することや学問の幅を広げることに留まら-  
ない作用が文学をとおした教育にあった。

### 3 「教養科目」としての哲学、 「グルント」としての哲学

生徒や学生に「文化」以上の何かをもたらし  
たと考えられる文学にせよ、「教養科目」が必要  
とされたのは、Tokyo Commercial College で

はなく、語義矛盾を含みながらも Tokyo Uni-  
versity of Commerce と英語表記したところに  
示されるように、社会科学系の総合大学という  
意気のあらわれであったというのが、現時点で  
最新の学校史における見解である<sup>44)</sup>。

座談会においてもそれと同じ見方がなされて  
いるが、「総合大学主義」は高商および商大の中  
心的な教官であった福田徳三によるものとみな  
される。「ユニヴェルシタス・リテラルム」<sup>45)</sup>  
を「大学の本義」として認識した福田が<sup>46)</sup>、一  
橋を「文科的総合大学」として発展させること  
を構想したというのである<sup>47)</sup>。じっさい、福  
田の死の前年 1929 (昭和 4) 年に小樽高商を卒  
業、商大に入学し福田の講義を受けた板垣與一  
の口からそうした発言がなされる<sup>48)</sup>。

そうした「文科的総合大学」構想は生徒や学  
生にも伝わっていたし、意識化されていた。た  
とえば、1919 (大正 8) 年、東京高商最後の予  
科生として入学し、翌年の東京商大開設時に商

43) Ueda, Tatsunosuke, “Saikaku’s ‘economic man’: a comparative study in socio-economic history with illustrations from Saikaku and Augustan English literature”, *The Annals of the Hitotsubashi Academy*, 7:1, oct. 1956, 10-32.

44) 『一橋大学百二十年史』、127-128 頁。

45) 外国語音のカタカナ表記として奇異であるが、『一橋大学百二十年史』でも第二編第二章第二節のタイトルにも似た表記が用いられている。ラテン語のウーニヴェルシタース・リッテラルム (üniversitäs litterärüm) の謂と考えられるが、ドイツ語で音写すれば、「ユニフェルシタス・リテラルム」となる。次の註 46) にも示すように、福田はこのドイツ語音写で表している。

46) 上原専祿が座談会とは別のおりに記したところによれば、福田は何よりも「研究の自由」と「学問の進歩」の確保を目指した。上原 専祿 「韻松亭の夜」、福田徳三先生記念会編 『福田徳三先生の追憶』、1960 年、122 頁。また、「大学の本義」については、座談会でも触れられた 1926 (大正 15) 年 9 月の「ユニフェルシタス・リテラルムの意義」と題された講演および翌 1927 (昭和 2) 年 5 月 11 日に「十九世紀における歐洲諸大学の確信を称し、併せて大学の本義を論じ、本学の現状におよぶ」と題された辛酉記念式の席上における講演において福田が説いているものである。後者の講演について、その要領が『一橋新聞』に 3 号にわたって掲載された。『復刻版 一橋新聞』 第 1 巻 不二出版、1988 年、221、225、239 頁 (『一橋新聞』第 51 号 (1927 年 5 月 16 日付)、第 52 号 (1927 年 6 月 6 日付)、第 55 号 (1927 年 7 月 18 日付))。なお、福田の大学論については、以下の研究もある。金子 勉 「大学論の原点——フンボルト理念の検討——」 『教育学研究』 第 76 巻第 2 号、2009 年 6 月、38-49 頁。

47) 「社会学」、658 頁。福田も、東京高商復帰以前に勤務していた慶應義塾の講義において、新カント派西南ドイツ学派のヴィンデルバントやリッケルトの歴史哲学について紹介しており (野村 兼太郎 「慶應義塾における最後の弟子」 『福田徳三先生の追憶』、72 頁。)、福田の「総合大学主義」も、リッケルトの言う「文化科学」の含意をもった、つまり「自然科学」と対になる「文化科学」の総合大学と考えられる。

48) 「社会学」、658 頁。なお、板垣の履歴については、以下を参照。「名誉教授板垣與一年譜」 『一橋論叢』 第 68 巻第 5 号、1972 年 11 月、598 頁。

49) 杉本の入学、進級、卒業については『東京高等商業学校一覽』『学生生徒現員』および『東京商科大学一覽』『学生生

大予科2年となり、その後、商大に進学・卒業した杉本栄一は<sup>49)</sup>、在学時における生徒・学生の「一般の空気」を以下のように表現している。

われわれの学生時代の一般の空気というものは、経済学とか商学とかいう狭い考え方ではいけない、大学というものはやはり総合大学でなければならぬ、こういう考え方で文学とか歴史学とか哲学とかというものを非常に重んじました。〈中略〉狭い専門に閉じこもらないで広く哲学とか社会思想とか文学とか歴史とか、そういうものを基礎にしなければ、立派な経済学はできない、という考え方がありました。これが第二期の学校の経済学の特色であったと思います<sup>50)</sup>。

「狭い専門」ではない広い「基礎」としての「教養科目」が求められていたのである。

しかし上原は、杉本の指摘したような「空気」が彼が入学した1916（大正5）年にはすでにあったことを指摘しており<sup>51)</sup>、一時的に退官を余儀なくされていた福田が慶応から高商に戻る1919（大正8）年以前から総合大学への志向があったことが示唆されている。

また上田は、すでに高商期に底流として総合大学志向があったこと、それを象徴するものが「英文学の精神」であったことに加えて、福田

には留学しドイツの大学を体験するという契機があったことを指摘する。

福田先生がそういうことを言い出されたそのもとを尋ねると、やはり青年時代神田先生やスウィフト先生のところでは英文学の精神を学ぶ、後ドイツへ行ってヨーロッパ大学の本質たるウニウエルシタス・リテタラールムについて考えさせられたことに由来するものと思います<sup>52)</sup>。

とりわけ福田の復帰以降、前景化した「総合大学主義」が後に教官となる卒業生たちにも留学を介して承継されていったことは、「シュトゥルム・ウント・ドラング」という小見出しが付される形で語られる。「シュトゥルム・ウント・ドラング」は、ドイツ語の“Sturm und Drang”であり、戯曲の題名に由来する18世紀後半ドイツの文学運動を表す名辞であるが、そこで語られるのは、留学に送り出す年長教官・大学長による商学や経済学に拘泥しない学びへの勸奨である。

たとえば、上田は留学に際して以下のように伝えられたという<sup>53)</sup>。

商業経済一本じゃ行き詰まるから、何かグルントになるものを同時にやってこいという命を奉じて外国に行ったもので

徒姓名」で確認できる。

50) 「社会学」、656頁。

51) 「社会学」、658頁。

52) 「社会学」、657頁。福田に「商業学研究の爲め満三年間独学留学」の命がでたのは1897（明治30）年3月13日（『官報』第4107号（明治30年3月15日付））、帰国は1901（明治34）年9月17日である（『官報』第5467号（明治34年9月20日付））。

53) 上田の留学は専攻部卒業の翌々年1918（大正7）年からであり、商業英語および商業学研究のために米国への留学が命じられているが、上田のペンシルバニア大学（University of Pennsylvania）に提出された論文は“Studies in shipping as an enterprise from the legal sources of the medieval and early modern periods”であり、中・近世の海運をめぐる商業史であった。坂野「東京商業学校・高等商業学校・商科大学・産業大学の外国語科目を担った日本人教員とその教育」、19-20頁。

54) 「社会学」、659頁。

す<sup>54)</sup>。

また杉本も、1929（昭和4）年からのドイツ留学にさいして、当時の大学長佐野善作から次のことばを与えられたという。

ぼくが留学するときに佐野先生がいわれることに、自分は実学をやった、それで行き詰った。ところが福田や三浦〈新七〉はもつと広い学問をやって来たから、行き詰まらない。君も——私は経済原論ですが、——経済原論を講義するつもりで勉強して来なくてよろしい、もっと基礎になることをやつて来い、こう言われたのです<sup>55)</sup>。

この場合の「基礎」とは、上田が言われた「グルント」と同義であろうが、杉本は福田の研究を引いてその「グルント」の中身を明らかにする。

福田先生のトーマス・アキナスを書かれたあの気持ちは、内容からいえばいろいろ批判もあるでしょうが、経済学というよりも、哲学とか、歴史学とか、そんなところからやらなければならぬ、こんなような気分ですね。

文学と同様に、「教養科目」として認識される哲学や歴史学だが、杉本は哲学や歴史学が経済学の「グルント」だと示すのである。

この「グルント」とは高商・商大の教育に幅を与える＝「文化」を附与する「教養科目」と

は異なるものという印象を与える。杉本は佐野の言葉として「広い学問」と言っているが、同じ杉本の、福田のトマス・アキナス研究の描写からは、広がりとしての「教養科目」にたいして、「グルント」は学問的な深みというイメージが喚起される。

いずれにせよ、福田のみならず、のちに教官となった卒業生たちは、欧米の大学を肌で体験するとともに、「グルント」としての哲学や歴史学を学び、それらを高商・商大での教育に還元していくことを使命として、留学に出かけていったのである<sup>56)</sup>。

そうした留学組の一人が、日本において経済哲学を創始したとされる左右田喜一郎である。彼と哲学との関係は、「教養科目」と「グルント」との相違をより明確にしてくれるように思われる。

高商の卒業生である左右田が哲学に目覚めたきっかけは高商での教育ではなく、ドイツ留学であったという、増田四郎の語りがある。左右田はもともと英語文献をベースに「信用券貨幣論」をテーマに卒業論文を書いたので<sup>57)</sup>、本科の生徒や専攻部の学生のころは必ずしも哲学に強い関心をもっていたわけではないだろう。

彼は、足かけ10年に渡る留学期間でイギリス、ドイツ、フランスを回っている。専攻部を卒業した1904（明治37）年に渡欧するが、最初に向かったのはケンブリッジ大学でアルフレッド・マーシャルとウィリアム・カニングガム（William Cunningham）の門を叩いている。

<sup>55)</sup> 「社会学」、660頁。

<sup>56)</sup> ただし、それを直接、大学での教育に活かす機会が与えられていたわけではないことも上田は指摘する。「まずわれわれを助教授にしないというんです。われわれを専門部に押し込めて、大学の方へ入れない、入れるには非常に厳重な試験をして入れる、というような態度だったのでですね。それで、学位をとれということも言われましたし、それから三つか四つ条件が——われわれの方で条件と考えていたのですが、そういうものがあって、これに対して皆よりより〈原文では、「くの字点」表記〉不満を洩らしていました」 「社会学」、660-661頁。

<sup>57)</sup> 「社会学」、654頁。左右田は1898（明治31）年9月に予科に入学し、1904（明治37）年に専攻部銀行科を卒業している。左右田の入学、卒業は、当該年度の『東京高等商業学校一覧』による。

左右田の弟子であった南亮三郎（小樽高商教授）は「思うところあって翌年独逸フライブルヒ大学に転学」と記している<sup>58)</sup>。マーシャルとカニンガムとはケンブリッジにおいて対立していた存在であるが、カニンガムがイギリス歴史学派につながる人物であること、左右田がカニンガムも留学したドイツのテュービンゲン大学に後に留学していることから<sup>59)</sup>、カニンガムの歴史学派的なアプローチに共鳴し、歴史学派の隆盛しているドイツに移ったと考えられる。左右田の師である福田がドイツ新歴史学派のルヨ・ブレンターノ (Lujó Brentano) を師にもっているにもかかわらず直接、ドイツに行くことなく、まずイギリスに向かったことは、左右田がそもそも別の目的をもって留学したことを示唆しているであろう。

こうして10年に渡る留学を終えて1913（大正2）年に帰国した左右田であったが、東京高商教授になることはなかった。父が亡くなったため家業の左右田銀行の頭取に就任することになる。ただ、高商・商大にも講師として出校し、のちには京都・東京の帝国大学文科大学の哲学担当講師ともなっている<sup>60)</sup>。

教授にならなかったとはいえ、左右田が哲学の研究や教育を通じて商大生に与えた影響は決して小さくはなかった。それには大きく二つがあった。

まず一つはゼミナールを通じて学生の哲学に対する渴望に応えたことである。1922（大正11）年に予科に入学し、1928（昭和3）年に大学本科を卒業した太田可夫は<sup>61)</sup>、次のように話す。

大正十四、五年ごろだと思いまが、亡くなられた助教授川村豊郎さんがまだ助手時代で、なくなられた本多謙三さんも加わられて、左右田先生が特別に哲学をやりたい者のためにゼミナールを開かれた。今は岩波ホールになっております三井ホールでゼミナールを開いてくださいました。哲学の研究をさかんにした先生熱意の現われだったのです。二十人をこえる実に熱心な学生がそこに集まりました<sup>62)</sup>。

ただし、1923（大正12）年に大学本科を卒業した、上述の南もすでにゼミナールに参加しており、左右田のゼミナールはそれ以前からあった。また、左右田はむしろゼミナールしか担当していなかったようである。

〈左右田〉博士が教壇に立たれたのは極めて稀で、一年一度の特別講義の場合だけであったが、少数の門弟の為に隔週三時間、時には五六時間もぶっ通して開かれた研究指導を通じて私共の受けた感化と印象は、到底生涯に亘って寸時も忘るゝを得ない程深く、気高く、また門生に対せられた態度は頗る謹厳律儀であった。博士への入門の手續は、他の多くのゼミナールに於けるとは全く異なって、予め課せられたる論文を提出するにあつた。カントの謂わゆる『荊棘に富んだ批判の小径』を私共はもう、入門の第一歩から選ばされたのである<sup>63)</sup>。

58) 南 亮三郎 「左右田博士とその業績」 『商学討究』

59) 佐々木 憲介 「W. カニンガムにおける理論と歴史」

60) 南 亮三郎 「左右田博士とその業績」 『商学討究』

61) 太田の在籍は、当該年度の『東京商科大学一覽』でできる。

62) 「社会学」、663頁。

63) 南 「左右田博士とその業績」、415頁。

第2巻第2号、1927年12月、412頁。

『経済学研究』第55巻第4号、2006年3月、43-44頁。

第2巻第2号、1927年12月、412-413頁。

南によれば、そのゼミナールはすでに哲学的素養を持つものだけに門戸が開かれていたものであった。

左右田が与えたもう一つの影響は、田邊元、桑木巖翼、天野貞祐、そして天野の師である朝永三十郎といった当時の日本における錚々たる哲学者を講師として招聘し、哲学者山内得立とくりゅうの商大教官に推したということである。座談会でも板垣が言う。

左右田先生が、ドイツから新カント派の哲学をもって帰られて、京都の西田〈幾多郎〉さんと論争されたり、それからあそこ一橋の哲学を盛んにするために、外部から田邊元さん（大正十年から十四年まで）とか、天野貞祐さん（大正十年から十二年まで）とか、あるいは山内得立さんとかいう諸先生を集められた<sup>64)</sup>。

山内は、京都高等工芸学校教授として留学中であった1921（大正10）年10月6日、商大本科の助教授として採用されることになる。1931（昭和6）年に京都帝国大学文学部と兼任となったことからわかるように、その専攻は左右田のような経済哲学ではなく、純粹哲学であった。山内のゼミナールに加わった太田は言う。

山内先生は全然商科大学の学風、経済学、社会学などに注意を払わないで、先生の独特の哲学の研究をされ、学生の指導をされました。ゼミナールではひたすらカントをコツコツと読みました。講義ではライブニッツ研究を發表され、つづいて現象学の問題がとりあげられたよう

でした。〈中略〉しかし先生は左右田哲学の問題を發展させたのではなく、哲学を發展させたのでした。商大の学風を受けつがれたのではなく、商大に一つの新しい学風を吹き入れた人でした<sup>65)</sup>。

左右田自身は左右田銀行の破綻をきっかけに1927（昭和2）年、すべての公職を退き、商大への出講もやめたが、自身の教育だけでなく、彼によって招聘された哲学者たち、それも純粹哲学を専攻するものたちによってもたらされた哲学は商大に根づいていくこととなる。選択科目ではあるものの「哲学」という科目はカリキュラムのなかに維持されていくし、京都帝大との兼任ではあったが山内も在任し、哲学のゼミナールが続けられていくことになる。

商大における哲学は、左右田が招聘した哲学者の影響のもとで、純粹哲学の研究者も輩出した。座談会に参加した太田以外には、藤井義夫、馬場啓之助、高橋長太郎など、東京商大の外で哲学を教授する研究者が誕生した。太田が、山内の「新しい学風」が「いまの社会学部に筋をひいている」と述べているように<sup>66)</sup>、山内の哲学は旧制の商大よりも新制大学としての一橋につながっていくものだったのであろう。

こうした商大の教育の幅を広げる哲学とは別に、左右田哲学は経済学の基盤となるような哲学を築いた。早逝したとはいえ杉村広蔵、川村豊郎、本多謙三といった商大の教官となるような後継を生み出したのである。太田は言う。

左右田哲学は杉村先生がデヴェロッパされた。そして、病気で早く亡くなられましたが、本多謙三さんも、社会哲学、あるいは経済哲学の問題を考えようとな

64) 「社会学」、661頁。

65) 「社会学」、665頁。

66) 「社会学」、665頁。

さったようです。川村さんも、ドイツから帰って来られてから担当の金融論と一緒にハイデッカーの話を並行してなされたようでしたが、仕事を完成せずに他界されました。経済学あるいは社会学の哲学的な見方をつきつめて行かれたのはただ杉村先生だけでした。それは先生の経済哲学の体系として残されているものです<sup>67)</sup>。

彼らは、「経済哲学」にとどまらず、社会科学の基礎となる「社会哲学」とも呼べるようなもの生みだしていったのである<sup>68)</sup>。

つまり、左右田が残した二つの系譜、純粹哲学と「社会哲学」とが「教養科目」と「グルント」とそれぞれに対応していると考えられるのである。

しかし哲学が「教養科目」あるいは「グルント」としてどれほどカリキュラムに位置づけられていたのかは座談会においては述べられない。商大予科においては高等学校高等科、いわゆる「旧制高校」のカリキュラムに準ずることが求められたため、「哲学概説」という科目が置かれた。しかし、商大昇格後、1933（昭和8）年6月までこの科目を担当した紀平正美<sup>ただよし</sup>については、太田がある学生のエピソードのなかで名前を挙げるだけで、それ以上に述べられること

はない。結局、座談会においては、哲学が社会科学、とりわけ経済学の「グルント」として暗示されるにすぎない<sup>69)</sup>。

## 4 選びとられる歴史学

商大への昇格はそもそも、3年制の予科を設置し、そこで高等学校のような高等普通教育をしたいということであったと杉本は言う。

何のために昇格したかと言えば、それは予科がほしい、高等学校教育がほしいということであった。そういうふうにならぬ予科生は話されもしたし、そういう気持ちであった。東京商科大学の中心は予科だ、学部というものは昔からあった専攻部がそのままになったのだという気持ちがあって、予科の講義はどんな教科内容を持たねばならぬか、それは高等商業の予科みたいなものではだめだ、哲学、文学、歴史学、高等数学、そういったものをやらなければいけないというので、実はそういう運動をやりまして、連判状なんかつくったものです<sup>70)</sup>

そうした高等普通教育に含まれるもののうち、文学、哲学に関する語りが小見出しを付すことができるほど長々と語られるのにならぬ

67) 「社会学」、665頁。

68) 残念ながら杉村は、1935（昭和10）年に博士学位請求論文を提出するものの大学教授会において否決され、その原因となった白票を投じたグループを糾弾する運動を展開し、翌年5月に免官となった。いわゆる「白票事件」である。『一橋大学百二十年史』、143頁。また引用のとおり、本多も川村も早逝してしまい、その流れは細いものになってしまう。

69) ただ、経済学の座談会にも参加していた板垣は以下のように述べている。「私が大学に入ってはじめて福田先生の経済原論講義を聞いたのは昭和四年でしたが、そのときは既に左右田先生は亡くなられたあとでした。そのときの講義の劈頭に福田先生は次のように云われました。諸君、経済学を学ばんと欲すれば哲学を学ばざるべからず。、哲学を学ばんと欲すればカント哲学を学ばにしかず、カント哲学を学ばんとすれば、第一批判、第二批判、第三批判とあるが、その中でカントみづから書いた入門書プロレゴメナを読むに如かず、と言われて、これを中心に二回、四時間の講義をされ、それから経済原論の講義に入られたのです。」「経済学」、374頁。福田が一年生向けの経済原論の講義で、哲学、とくにカント哲学を経済学を学ぶための「グルント」として提示していたことは分かる。

70) 「社会学」、662頁。

して、歴史学に関してはわずか一つの小見出し「歴史の横井時冬」がつけられるだけである。商大の「歴史学」といえば、文明史を講じ、学長にもなった三浦新七が想起されるであろうが、三浦については大きく語られることはない。横井は1891（明治24）年から1906（明治39）年まで講義を担当したと述べられるが、三浦が横井の影響で歴史を始めたわけではないとも語られる<sup>71)</sup>。しかし、座談会においてはそれ以上に詳しく三浦について語られることはなく、「歴史学」という名辞はしばしば語られるものの、高商・商大における歴史教育について詳述されることはない。

とはいえ、一つだけ暗示的に語られていることがある。1915（大正4）年のカリキュラム改定である。座談会では、1916（大正5）年から実施された新たなカリキュラムが総合大学の萌芽であったと判断される文脈がある。板垣は以下のように述べている。

大正五年という時期は、これは制度の変遷の上からみても、一時期を画した年だったんです。大正五年に第五回目の改正学科課程表というものができたのです。この改正学科課程表は大正四年に既に改正された東京高商のカリキュラムがモデルになっているのです。このころから、それ以前の時代におけるカリキュラムとは非常に違った、もっと幅の広い、分化した内容を盛ったカリキュラムに変ってきているのです。学校の学科課程の中でも本当に充実したのは大正四年、五年からですね。ですからその当時から

昇格の気構えは学問の内容からもできておったわけですね<sup>72)</sup>。

板垣の言い方では少しわかりにくいですが、高商では1915（大正4）年からは翌年にかけて様々な規程の改定がおこなわれている。その一つは、如上のとおり、始業時期を9月から4月に変更することであった。そのほか、予科を持たない三年制の高商、当時の長崎、山口、小樽のそれぞれの高商からその卒業生を東京高商の三年次に編入させ、専攻部への進学のを開いた<sup>73)</sup>。予科を持たない三年制の高商での修業後、東京高商での三年次1年と専攻部2年の課程とをセットとして修業年限を通算6年とし、大学化へと舵が切られたのである。そして学科目についても、1915年9月に「学級学科課程及専攻部規程中を大に改正」している<sup>74)</sup>。

たしかに、学科課程の改正は商大そして新制大学への流れを造るものであった。昇格時の商大は専攻部の流れにしたがって、「貿易及経済科」「商工経営及計理科」「銀行科」「交通及保険科」「領事科」の五つの分科によって構成され、学科目の構成は必修科目と選択科目とに分かれたが、必修科目では「商業学に属するもの」「経済学に属するもの」「法律学に属するもの」、それに「語学に属するもの」、選択科目では、「商業学に属するもの」「経済学に属するもの」「法律学に属するもの」、それに「その他」といづれも4系統に分かれていた。「科」は1922（大正11）年度から廃されたが、1934（昭和9）年度からは三部制が取り入れられ、大学本科第二学年からは第一部商学系、第二部経済学系、第三部法学系に分けられ、それぞれの部が指定する学

71) 「社会学」、655頁。

72) 「社会学」、658頁。

73) 予科のあった神戸高商からは、それ以前も卒業生の専攻部入学が認められていた。

74) 「沿革概略」『東京高等商業学校一覧 従大正五年至大正六年』

科目を履修する仕組みへと変更される。1949年以降の新制大学の学部母体となるものが造られていったのである。こうした流れの起点となるのが1915年の学科課程表の改正であった。

その改正の要諦は『学校一覧』に掲載された1914年度と1916年度のそれぞれの学科課程表を比較すればわかるが、概して次の二点があげられる。商学中心からの脱皮と学科の分化・高度化である。1914年度では全19科目中、商業系の科目が9にたいして、経済系が3、法律系も3である。ところ1916年度では、26科目と科目数が大幅に増えているだけでなく、商業・経済・法律はそれぞれ10、7、4ととりわけ商業系に対する経済系の比率が上昇している。またたとえば商業系では、1914年度には「簿記」としてひとくくりにされていたものが、1916年度では「銀行簿記」「英文簿記」「計理学」という三科目に分かれたし、「銀行及取引所」「交通」「保険」などの科目が新設されている。経済系でも「経済学」という科目が「経済大意」「経済原論」「貨幣論」といった形に細分化されたり、「東洋経済事情」や「商業政策」といった科目が増設されている。

これらの変化のなかであまり注目されることはないが、歴史系の科目においても変化があった。予科に歴史系の科目が開設されたのである。1914年度までは一年制の予科には歴史にかかわる科目はなかったが、1916年度以降は

「近世史」の授業が追加されている<sup>75)</sup>。この近世史は英語で講義がおこなわれたようで、それ以前、週32時間中9時間があてられていた「英語」の授業が1時間この科目に振りかえられたという側面もあり、英語科目の一環という見方もできる。しかし、歴史をテーマとした科目が新設されたのはたしかである。

この高商期予科における「近世史(英語)」を最初に担ったのは如上の三浦であるが、翌1917(大正6)年度からは木村重治が担当している。木村は立教学院専修科を1896(明治29)年に卒業した後、渡米、1900(明治33)年にリベラル・アーツ・カレッジのホバート・カレッジ(Hobart College)卒業後、ハーバード大学に進学し歴史学を学び1903(明治36)年に卒業し、M.A.の学位を取得した人物であり<sup>76)</sup>、純粋な歴史学徒といえる。

帰国後の彼の経歴は判然としないところはあがあるが、1908(明治41)年11月1日発行の奥付のある『西洋史眼』は慶應義塾大学教授の肩書きで執筆している<sup>77)</sup>。その後、1909(明治42)年9月29日付で山口高商教授(英語担当)に着任し<sup>78)</sup>、高商での教育にかかわり始めている。1912年度には山口高商で、英語だけでなく「商業歴史」を担当しはじめ<sup>79)</sup>、高商における歴史教育に従事しはじめる。東京高商には遅くとも1917(大正6)年までに着任し<sup>80)</sup>、大学昇格後の1923(大正12)年12月18日まで在

<sup>75)</sup> この「近世史」という名辞はこんにちの使用法とは異なる。後述のとおり、1916年度の『学校一覧』に掲載された「教授要旨」によれば、「十八世紀以後に於ける歐洲文明史一斑」を教授することになっており、こんにちの「西洋近代史」に相当する。

<sup>76)</sup> 『慶應義塾百年史』別巻(大学編)、1962年、150頁。

<sup>77)</sup> 国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/776636> 最終アクセス日: 2017年8月20日

<sup>78)</sup> 「木村重治外七名山口高等商業学校外七校教授ニ任官ノ件」国立公文書館デジタルアーカイブ <http://www.digital.archives.go.jp/das/meta/M0000000000003026797> 最終アクセス日: 2017年8月20日

<sup>79)</sup> 『山口高等商業学校一覧 自明治45年/大正元年至同2年』国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/941104> 最終アクセス日: 2017年8月20日

<sup>80)</sup> 『東京高等商業学校一覧 従大正六年至大正七年』の「職員」欄にその名がある。

籍し、同日付で長崎高等商業学校校長となっている<sup>81)</sup>。

木村の『西洋史眼』は、古代から現代までの西洋史を網羅した著作であるが、彼は慶應義塾大学では史学科の西洋史だけでなく、政治学科で「米国政治史」を講じたようである<sup>82)</sup>。山口高商では「商業歴史」を担当しているが「商業史」の専門家ではない。そのため、木村の「近世史（英語）」は「商業史」というよりもヨーロッパ近代史であったことが推察される。実際、学校一覧に掲載された「教授要旨」には、「十八世紀以後に於ける欧州文明史一斑」と記されており、産業資本主義が誕生して以降の、まさに経済学が誕生する時期の近代ヨーロッパについての概要を学ぶ、普通教育であると同時に、経済学を学ぶための基礎となる科目であった。

1915年のカリキュラム改正においては、歴史系の科目にかかわってもっと地味な変化も見られる。本科の学科課程表は「修身」が最初に書かれ、その後、商業系、経済系、法律系、語学および体操と並べられるという科目群の分類が見られるが、歴史系の科目は、1914年度版では商業系のなかに「商業歴史」として置かれているのに対して、1916年版では法律系科目のあと、「英語」の前に「商業史」が書かれている。「商業史」が商業系の科目としてではなく、「教養科目」の場所に置かれているのである。科目名は「商業史」であるが、商業系科目ではないものとして再配置されたと見てとれるのである。

しかし、たしかに「商業史」科目の掲載順に

変化があり商業系科目を外れたと考えられるのであるが、「教養科目」とは考えられていなかったようである。じっさいに、学校一覧掲載の「教授要旨」を1914年度と1916年度とで比較してみてもなんら変化が見られない<sup>83)</sup>。「商業史」は商業系科目を外れても、教育や学問の幅を広げるという意味では、「教養科目」という位置づけを与えられなかったと考えられる。

商大期に入ると、歴史学教育はさらに充実する。商大予科に「歴史」という科目が導入され、高等普通教育として歴史系科目が配されることになる。先述のとおり商大予科では、「旧制高校」のカリキュラムに準拠することが求められたため、「歴史」という科目が導入され、高等普通教育としての歴史学が講じられることになった<sup>84)</sup>。そして大学本科では、「歴史」の発展として「経済史」「社会思想史」などが講じられるようになる。「商業史」という科目は商大本科のカリキュラムには組み入れられず、高商期に「商業史」を担当してきた三浦は、選択科目としての「経済史」「文明史」を開講した。また、山口高商で「商業歴史」を担当した経験を持つ木村は予科教授となり、「英語」とともに高等普通教育としての「歴史（西洋史）」を担当し、大学講師としては「米国政治史」を講じた。「商業史」は商学専門部と商業教員養成所に「商業歴史」として残り、三浦が担当することになった。

科目・カリキュラムの点では上述のとおりとなるが、社会学の座談会からは直接、これ以上のことを読みとることができない。そこで、社

81) 離任時期および転出先については、『東京商科大学一覧 昭和9年度』「旧職員」欄の記載による。

82) 『慶應義塾百年史』別巻（大学編）、552頁。

83) 教授要旨にはテーマのみが挙げられている。具体的なテーマは以下のとおりである。「一、内地商業、外国貿易、貨幣、度量権衡、金融事情、内地交通、航海行、鉱山業、工業／二、自足経済時代の商工業、封建制経済時代の商工業、メルカンチリズム時代の商工業、十九世紀の商工業」

84) 一年次には「日本史」と「東洋史」とをあわせて週4時間、二・三年次にはいずれも「西洋史」が週2時間という形で分けられていた。

会学の座談会参加者 13 名中、上田、大塚、上原、杉本、増田、板垣の 6 名も参加し、「一橋歴史学研究の学風」という小見出しが付される形で歴史学に焦点が合わされた内容を含む、経済学の座談会を参照する。

経済学の座談会では、その小見出しに先だつて、福田によって歴史に対する興味が高められたことが指摘されている。発言者は上田である。

その頃〈福田が留学から戻った 1901 (明治 34) 年以降〉の福田先生のお弟子さんたちは、藤本〈幸太郎〉先生が言われたように、歴史を見直すと言いますか、歴史に対する興味が非常に刺激されたらしいですね。上田貞次郎先生も、経済における発展ということを福田先生から教えていただいた。これが非常な刺激になって、遂に学者になる決心をしたと言っておられた<sup>85)</sup>。

それを受けて、藤本も次のように答えている。

ぼくの前にも左右田君、あれがやはり歴史が好きでコツコツ〈原文では、「くの字点」表記〉と勉強しておった。みな福田先生の影響を受けています<sup>86)</sup>。

上述のとおり、福田はドイツで新歴史学派の中心人物であるブレンターノの教えを受けたわけであるから、福田が歴史を重視するのは当然のことである。また帰国後の一時期には横井とともに「商業歴史」も担当した<sup>87)</sup>。

このように福田によって歴史的な視点が喚起

されただけでなく、ほかの教官や授業からは史料についての考え方や歴史学の方法についても学ぶ機会があった。史料については社会学の座談会で増田は次のように語っている。

図書館に、横井先生の集められた資料——例えば東寺の百合文書だとか、高野山文書だとか、日本商工業史関係史料の筆写されたものがかなり残っているのです。最後に、「横井時冬記」と書いている<sup>88)</sup>。

さらに、以下のように続ける。

そして非常におもしろいと思いましたが、そのころ横井先生が商業文を教えられたときに、日本の商人の書いた手紙を実例に引いて、時代的にずっと解説して行かれた。ほとんど今まで忘れられているような江戸時代のいろいろ〈原文では、「くの字点」表記〉な種類の手紙を引いて、どういう商人はどういう書き方をすると、行商人はどのような書き方をすると、実例を引きながらやって行かれたということを聞いています<sup>89)</sup>。

また増田は、経済学の座談会においてはさらに踏み込んで、商大における歴史学教育の特徴の一つとして「史料中心の研究法」の指導をあげる。

そうして非常に地味な、実証的といえますか、史料中心の研究法を、私共はたたくこまれたものでした。例えば幸田先生

<sup>85)</sup> 「経済学」、359 頁。

<sup>86)</sup> 「経済学」、359 頁。

<sup>87)</sup> 横井が日本の商業史を中心に、福田は西洋商業史を主に教えるという分担はあったであろう。註 83) に示した「教授要旨」にしたがえば、「一」を横井が「二」を福田がという形で分担ができそうである。

<sup>88)</sup> 「社会学」、655 頁。

<sup>89)</sup> 「社会学」、655 頁。

のごときは、先ほどどなたかお話が出ましたように、オリジナルな原本に当って研究する、それがどんな効果があってもなくても、とにかく原本を見ろ、ごまかすことは絶対にいかぬということを、身をもって教えられた。これはきわめて簡単なことですが、その簡単なことが歴史の研究では非常に必要なことなのです。史料を集める、そしてこれを正しく理解して理論をたてる。思いつきは絶対にいかぬ、そういうふうに実にやかましく教え込まれたわけです<sup>90)</sup>。

「幸田先生」というのは、増田が商大で属したゼミナールを担当した日本経済史の幸田成友のことである<sup>91)</sup>。

こうした史料中心主義は、増田に受け継がれただけでない。ドイツでカール・ランプレヒト (Karl Lamprecht) に師事した三浦や、オーストリアでアルフォンス・ドーブシュ (Alfons Dopsch) に学んだ上原も同様に、広範に史料を蒐集し、それらを読み込んでいくという姿勢を身につけていた。たとえば上原は、自らの読書について記した小文「本を読む・切手を読む」において、留学時代のドーブシュのゼミナールで身につけた読書慣行を研究成果をあげるという実利を目的とした「禁欲としての読書」(傍点原文)と呼んだが、留学から1945年8月までそれを続けた。上原は言う。

ウィーンでは、図書・文献の基底としての史料を読むことを主作業とするように

なり、その史料についても、自由且つ主体的な消化が可能であるためには、先人たちの史料研究に満足することなく、自分自身で史料の検討と批判を試みる必要があることを体認するにいたった。〈中略〉手に取りたい誘惑にかられる東西の古典や、時代の息吹きを伝える評論類には眼をつぶり、研究文献や雑誌論文の渉獵さえも極度に切りつめ、ファッショ化してゆく社会の動向、日中・太平洋戦争へのめり込んでゆく政治の狂態に対してもあえて介意することなしに、ひたすらドイツ中世史の原史料を読みつづけていった<sup>92)</sup>。

上原が歴史学徒としての訓練を積んだことは、幸田と同じように、商大での教育に還元されたと考えられる。

しかしそうした教育は体系化されたものではなかった。増田は次のようにも言う。

一橋の歴史学を考えてみますと、極めて一般的にいて先生から弟子へと順に歩いて行くというものが案外少ないのでして、外から入って来られた偉い先生方の影響がポツポツ〈原文では、「くの字点」表記〉とあるわけです。そういうわけで、一橋の歴史学は一般に皆一人で勝手に自力でやらなければならぬというやりかたに置かれていたとも考えられます。〈中略〉それで結論的に申しますと、一橋の経済史学は、伝統がないということ

<sup>90)</sup> 「経済学」、376頁

<sup>91)</sup> 1923(大正12)年に商大を卒業した中山伊知郎によれば、幸田を「日本経済史を充実するために大阪から」商大に招聘したのは福田だと言う。中山 伊知郎 「福田先生の道具立て」 『福田徳三先生の追憶』、125頁。幸田は1922(大正11)年9月5日付で予科教授兼大学助教授に採用されている。『東京商科大学一覽 自大正11年至大正12年』 「職員ノ異動」。また、木村重治が長崎高商へ校長として転出した1923(大正12)年からは予科で「歴史(西洋史)」も担当している。

<sup>92)</sup> 「本を読む、切手を読む」、290-291頁。

がそのままあたかも伝統となっていると言いますが、大分他の古い大学の史学とは異った趣があるように思います<sup>93)</sup>。

そして、さらに言葉を継ぐ。

つまり一本立ちで、その意味では非常に素人くさいのですね。素人くさいのだけれどもまたそこにはよい面もある。一口に申せばどの先生もあまり専門家振らないんですね。素人が歴史学をやっているというので、東大なんかに見られないおもしろい味が出ている。ぼつぼつと一人ずつ苦しみながら、興味をひかれるままにいつの間にか歴史学を専攻した結果となってゆくのです。従って、歴史学は経済学やその他の領野とは大分違った色彩を持っているのではないかと思います<sup>94)</sup>。

また上原はこれに関連して言う。

結局歴史に関する伝統ということを使うとすれば、伝統らしい伝統はなくて、いつでもそこで自分で何をやってもよいし、同時に何もかも自分でやらなければならぬという伝統がある。〈中略〉師匠と弟子との間がちゃんときまっておって、弟子は師匠の方法とか問題とかを引継いでやるわけでもない。何でも出発点から自分でやる。と同時に先生から習うことは自分の問題にしなければならぬ。人のことただ祖述することはいけないので、問題は自分で考えて自分で方法を工夫して行かなければならないのだ<sup>95)</sup>。

自ら問題を発見し、その課題を解決することにあれこれと試行錯誤をする過程で歴史という視点あるいは方法の有用性に気づく。それが高商・商大本科における歴史学であった。歴史学という学問体系についてひとつひとつ積みあげるという形が取られるのではなく、歴史を教える教官が自らの問いに真摯に向きあった過程や結果を講義やゼミナールにおいて示す。それを生徒や学生は学ぶとともに、「史料中心の研究法」に触れる。そして自らの課題と向きあうときに、その視点や研究法を適用する。そうしたものが「グルント」であり、歴史学もまた、高商・商大における教育の「グルント」の一部を構成したのである。

## 5 おわりに

1950（昭和25）年、新制大学の一橋大学において、商学・経済学・法学・社会学という今日では学部を構成する組織のそれぞれで、過去を振り返る座談会が開催された。そこでは、前校である東京高商や商大において教育を受け、また教育にあたってきた教官が中心となり過去の教育や研究が回顧された。商学・経済学・法学の座談会においてはディシプリンに沿ったものとなったが、社会学の座談会においては、「社会学」はいわば高商・商大における「語学」や「其の他」の学問・教育を総称するものであり、外国語教育を含めた「教養科目」について語られることになる。

座談会では、「第一の時期」、すなわち高商期、「第二の時期」、すなわち商大期という過去について語り、そこから、座談会の翌年度に予定されていた社会学部発足の未来像を探るという形

93) 「経済学」、376頁。

94) 「経済学」、376-377頁。

95) 「経済学」、378頁。

で進められたと言えるであろう。つまり、過去における「教養科目」にかんする教育や研究が未来の姿のもとになったという形で語られるのである。そこで強調されるのは、「文科的総合大学」という高商期以来の理想像であった。

「総合大学」＝「ユニフェルシタス・リテララム」を「大学の本義」とする福田徳三に代表される大学観においては、商学や経済学、あるいは法学の教育、またそれらの基礎教育だけでは不足していた。文学、哲学、歴史学といった「教養科目」が必要とされたのである。

しかし、「教養科目」、文学や哲学、それに歴史学は学問や教育における幅の広さのみを生み出したわけではなかった。それらは、高商・商大の学問・教育において語る際にしばしば口にされる「グルント」としてあったのである。

「グルント」とは、ドイツ語の“Grund”に由来する言葉で、基礎、基盤の謂であるが、専門教育としての商学や経済学の基礎にあたる学

問や科目を意味したわけではない。「教養科目」を基礎としてその上で商・経・法学の科目を学ぶという積みあげ型の体系を持っているわけではない。むしろそれは、商学、経済学、法学、とりわけ経済学に奥行きや深さをもたらすものであった。

「グルント」としての文学、哲学、歴史学は、たとえば上田辰之助にとっては材料であり、福田にとっては視点であった。しかしそれらは、あらかじめ意識的に準備しておくことができるものではない。それらを学んでいるときには将来の使用を約束するものではない。生徒・学生たちにとっては、いわば頭の抽斗にしまわれてしまうものである。しかし、自らが問題を設定し、それに向きあうとき、材料や方法、視点としてふと想起される。頭の深くに沈潜してしまったものを、事後的に選び、取りに降りていくような、ものなのである。